



吉祥山永平寺全図／紙本墨画淡彩／縦 155.0×横 219.5 cm／江戸時代（17世紀）

永平寺に伝わる最古の絵図で、江戸時代初期の永平寺の景観を伝える。正徳4年（1714）3月9日、正徳の大火と呼ばれる火災によって、永平寺の伽藍のうち、仏殿・承陽庵・僧堂・方丈・衆寮・山門・浴室・東司が焼失する。この絵図は、正徳の大火以前の永平寺を描いた唯一のものである。その構図は永平寺の伽藍のみならず、塔頭や境内、門前周辺も描いており、江戸時代初期の永平寺を視覚的に捉えることができる。絵図の成立は、延宝4年（1676）から天和元年（1681）頃と推定されている。現在の山門は、正徳の大火後、寛延2年（1749）に永平寺42世円月江寂（1694～1750）の時代に再建されたもので、永平寺最古の建造物である。現在の山門の両側には、四天王像が左右2体ずつ、側面を向き合う形で安置されるが、絵図で描く山門には、仁王像が正面を向いて描かれ、正徳の大火以前の山門には、仁王像が置かれていたことがわかる。また、絵図中央付近に「開山石塔」とある部分は、永平寺の歴代住職の墓地があった菩提園であった。この墓地は、昭和5年（1930）の二祖国師（永平寺二世懐奘）650回忌にあたり、現在の寂光苑に移転する。そのため、現在この場所は、正門から聖宝閣、通用門辺りに該当する。